

令和4年度(第77回)文化庁芸術祭受賞一覧(参加公演・演劇部門6件)

区分	受賞者(団体)名	受賞対象	受賞理由
大賞	(関東参加公演の部) かぶしきがいしやよろずきょうげん 株式会社萬狂言	「祖先祭 初世野村万蔵生誕三〇〇年」の成果	多彩なゲストとともに野村万蔵家一門(萬狂言)が総力を結集した本公演は、翁と狂言風流、定評ある古典的名作、独り狂言、賑やかな大勢物と多彩な演目を取り揃えて観客を大いに楽しませた。なかでも九世万蔵新演出による「千々尉風流萬之式」は、万蔵家由来の酒をテーマとした遊び心が溢れていた。ベテラン、中堅、若手と役者陣も充実し、過去から現在に至る歩みを振り返ると同時に、豊かな未来への期待が高まった。
	(関西参加公演の部) しょうちくかぶしきがいしやみなみざ 松竹株式会社南座	「女の一生」の成果	主演の大竹しのぶの演技は、遠慮がちな少女から強い女性へと変化していく様が自然で滑らか。俳優陣の人物造型も的確で、豊かなアンサンブルを見せた。また、段田安則のテンポの良い演出は舞台全体を引き締めた。人はいつの時代も悩み、喜びなどと共に生きていく。戯曲の普遍性も示し、総合的に高い成果をあげた。
優秀賞	(関東参加公演の部) しょうちくかぶしきがいしやかぶさざ 松竹株式会社歌舞伎座	「芸術祭十月大歌舞伎第一部「荒川十太夫」」の成果	「忠臣蔵」の外伝物である神田松鯉口演の講談が原作の新作歌舞伎。赤穂義士・堀部安兵衛の切腹で介錯をした松山藩の下級武士・荒川十太夫の義を通そうとしたがゆえの葛藤が藩主周囲の人物との関わりの中で描かれる。構成がしっかりとし、尾上松緑の十太夫を始めとする俳優が的確な演技を見せ、再演に耐える佳品となった。
	(関西参加公演の部) げきだんみらい 劇団未来	「劇団未来 パレードを待ちながら」の成果	戦争では女性も戦っている。第二次大戦中のカナダが舞台。銃後に残された彼女達は強ばった世間の中で、愛する者がいない孤独に耐えて行く。5人の女性が各々の問題に悩み、衝突し、励まし合う、名誉を求める男達を冷ややかに見つめながら。仕事と演劇活動を60年間両立してきた劇団の志と蓄積が、力強い舞台を創り上げた。
新人賞	(関東参加公演の部) はなむら そうた 花村 想太	東宝株式会社「ジャージー・ボーイズ」における演技	“天使の歌声、フランキー・ヴァリ役に必須である、難易度の高いハイトーン・ボイスと歌唱法を体得した、待望の才能。前半では、あどけなさの中に天性の輝きがこぼれ出し、後半では、不幸に見舞われ鬨りが見える孤独な中年スターの姿を、確かな演技力で伝えた。重圧にも似た期待に応えたことで、更なるステップアップが期待できる。
	(関西参加公演の部) やまもと あや 山本 彩	空の驛舎「花を摘む人」の作	舞台は緑深いダム湖周辺。湖の底には村が沈んでいる。旅する者、過疎にあらがう者、村を出た者…。様々な背景を持つ4組の人々の会話が展開し、屋敷とひまわり、2種類の花のイメージが色鮮やかに立ちのぼる。研ぎ澄まされた簡潔な言葉で、生と死への思い、故郷の記憶など、深い人間感情を描き出した筆致は、今後の活躍を大いに期待させた。

令和4年度(第77回)文化庁芸術祭賞受賞一覧(参加公演・音楽部門6件)

区分	受賞者(団体)名	受賞対象	受賞理由
大賞	(関東参加公演の部) 公益財団法人 読売日本交響楽団	「第622回定期演奏会」の成果	桂冠指揮者シルヴァン・カンブルランが登場した本公演は、ドビュッシー2曲、巨大編成のヴァレーズ、10月に急逝した一柳慧の新作「ヴァイオリンと三味線のための二重協奏曲」と20世紀から今日までを繋ぐ意欲的な選曲が光った。厳格さと洗練を備えた指揮で、明瞭かつ色彩豊かな音楽を作り上げ、特にヴァレーズ「アルカナ」の多彩な音響を緻密にコントロールした演奏は圧巻であった。
	(関西参加公演の部) あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール	フィリップ・グラス「浜辺のアインシュタイン」の成果	ミニマルミュージックの金字塔的な傑作の上演にあたり、極限に挑戦するような超絶技巧を駆使して、その本質的な美に迫る演奏を成し遂げた。特に、古典から前衛、室内楽から演劇分野まで、幅広い音楽に造詣の深い中川賢一氏を中心に結集した、管・弦・鍵盤楽器、声の音楽家たちの演奏が高く評価された。また、その歴史的に意義深い企画力に対しても高く評価された。
優秀賞	(関東参加公演の部) 高島 一郎	「高島一郎 箏 リサイタル1834 きはめたくたる」の成果	江戸時代の箏曲の主要ジャンルをたどった企画は考え抜かれていて秀逸。段物「みだれ」で若手の中島裕康と生き生きとした演奏を繰り広げ、手事物「末の契」では、三味線抜きの変則的な編成で、尺八の藤原道山と渡り合った。幕末新箏曲に想を得た自作「新千鳥」では自身の技巧を存分に発揮し、「秋風の曲」では、ピリオド楽器の古箏を用い、「五段帖」では師砂崎知子と息の合った合奏を披露した。
	(関西参加公演の部) 倉橋 容堂	「倉橋容堂 古典尺八リサイタル」における「八重衣」の演奏	尺八楽の古典曲のみのプログラム。前半は迫力と安定感のある尺八本曲3曲を聞かせた。また後半の三曲合奏「八重衣」は、長年の演奏経験の蓄積による錬られた解釈が秀逸であった。過度な表情づけに陥ることのない抑制された表現の中に、助演者との軽妙なやり取りが随所に散りばめられており、その円熟した芸が聴衆を魅了した。
新人賞	(関東参加公演の部) 日原 暢子	「日原藤花維柯 箏曲古典の会」の成果	「秋風の曲」の独奏、「歌恋慕」と「常世の曲」の“打ち合せ”の合奏、宮城道雄作曲「石清水」の箏と尺八の合奏、地歌「屋島」の三絃と箏の合奏という4曲から成るプログラムは、日原藤花維柯が学んできた流派の独自の伝承を尊重し、その特徴と魅力を十分に引き出す意欲的な内容であった。繊細な節回しを明瞭な発音でしっかりと歌い上げ、箏の響きには美しい輝きがあり、ほかの楽器とのバランスにも工夫があった。今後の活躍を大いに期待させる表現力と高い技量が示された。
	(関西参加公演の部) 中嶋 俊晴	「中嶋俊晴カウンターテナーリサイタル～Distanz～」の成果	ドイツ語で「距離」を意味する「Distanz」をテーマとしたリサイタルでは、バロックから現代までの様々な地域の作曲家の曲が採り上げられた。非常に考え抜かれたプログラミングで、いずれの曲でも深い解釈に基づき表情豊かに歌われた。とりわけ、演出も伴ったリームの「ヘルダーリン断章」の演奏は圧巻で、極めて高く評価されるリサイタルであった。

令和4年度(第77回)文化庁芸術祭賞受賞一覧(参加公演・舞踊部門6件)

区分	受賞者(団体)名	受賞対象	受賞理由
大賞	(関東参加公演の部) 東京バレエ団	東京バレエ団「ラ・バヤデール」の成果	古典バレエ名作の、非の打ち所のない名演である。主演の上野水香は三角関係の愛憎に翻弄される古代インドの巫女＝バヤデールを神秘性といじらしさをもって造形し、恋人役の柄本弾、恋敵役の伝田陽美とともに迫真のドラマを描ききった。定評ある群舞にもさらに磨きがかかり、名場面「影の王国」では永遠を感じさせる霊的な世界を現出させた。
	(関西参加公演の部) 該当なし	-	-
優秀賞	(関東参加公演の部) Co.山田うん	「Co.山田うん2022新作 InC」の成果	ミニマルミュージックの起点となったテリー・ライリーの記念碑的な楽曲を用い、緻密に構成された演出と独創的な動きを活かした振付、さらにそれを高い水準の技量とチームワークで踊りこなし12人のダンサーの演技が高く評価された。音楽のコンセプトと同じく65分間変化し続けて、最終的に祝祭感をもたらす洗練された舞台が優秀であった。
	(関西参加公演の部) 法村 圭緒	法村友井バレエ団公演「クレオパトラ ラ・シルフィード」におけるマッジの演技	「ラ・シルフィード」の物語全体を支配する存在である魔女マッジ役を、的確で深みのある演技、大きな存在感、迫力を持って踊り、作品全体のレベルを引き上げた。この役は、世界中で古典バレエの主役を重ねたスターダンサーがベテランになって挑んで名演と語られる例が多々ある。法村も主演を重ねた経験を経ての今回の名演。振付を担いながらの活躍だ。
	(関西参加公演の部) 上方舞山村流	「山村流双葉会」の成果	動物を題材にした演目尽くしの番組で、蟹や狐、鼠をも「振り」によって巧みに描き出す日本舞踊の面白さを示した。個別には「狐の嫁入り」で山村若は目出度さを醸し出しつつ狐の嫁入りの様を好演。「猿蟹昔物語」では山村侃が猿や蟹を的確に舞い分けて滑稽な物語を紡いだ。流儀内に次代の上方舞を担う人材が育っていることを印象付けた。
新人賞	(関東参加公演の部) 工藤 朋子	工藤朋子フラメンコリサイタルvol.3「時と血と地と」の成果	日本の民族の大地に立脚したフラメンコとしての津軽との融和が見事であった。工藤の原点に立ち返って、自らの血を見直してみようという試みが成功した舞台だった。カンテをはじめ、パーカッションはもちろん津軽民謡の浅野祥やパルマに至るまで良き共演者に恵まれてはいたが、何よりも工藤の津軽とフラメンコにかける熱い情熱が観客の心を打ったのは間違いない。
	(関西参加公演の部) 東野 祥子	「ANTIBODIES Collective Newcreation / Performance in AWAJI 2022 Liminal」における構成・振付	昨年に続き、淡路島南部のDanto Tile工場を公演の会場としたANTIBODIES Collectiveは、今作で、その名の通り集合体の力を発揮した。そのパフォーマンスに対し、個人を表彰することは無粋であるが、団体の代表を務める東野祥子は、ダンサーたちへの振りうつしに限らない振付、すなわち辺地に多くのスタッフや観客を集らせ、繋ぎ、また広大な工場内を来訪者に回遊させる技を高めたと言える。その調整や誘導の術は、今日的な「振付」の意味や「振付家」の活動意義を伝えかつ広めるものとして、新たに評価されて良い。

令和4年度(第77回)文化庁芸術祭賞受賞一覧(参加公演・大衆芸能部門6件)

区分	受賞者(団体)名	受賞対象	受賞理由
大賞	(関東参加公演の部) 該当なし	-	-
	(関西参加公演の部) 林家 菊丸 <small>はやしや きくまる</small>	「第八回三代目林家菊丸独演会」の成果 <small>だいにほちかいさんだいにめはやしやきくまるどくえんかい</small>	女性を描くことに定評のある林家菊丸が「癩の合衆」「二番煎じ」「井戸の茶碗」という“侍の噺”三席で新境地を開拓。特に「井戸の茶碗」では、清貧な暮らしぶりの浪人、若き武士、正直者の屑屋を巧みに演じ分け、爽やかに温もりのある笑いを届けた。また、浪人の娘の心情をさりげなく織り込むなど、現代感覚にマッチした演出も光る。
優秀賞	(関東参加公演の部) 林家 はな平 <small>はやしや はなへい</small>	「ハヤシにのって～林家はな平独演会～」の成果 <small>はやしや はなへいどくえんかい</small>	若手芸人の“押し芸”が幅をきかせる昨今、はな平の脱力した芸風は貴重である。特に「火事息子」は高評価を得た。噺の肝である親子の対面の場面ではしっとりし過ぎず、勘当中の息子をそばに呼ぶ際の父親の細やかなせりふ回りで、複雑な心情を描くことに成功した。小さな注文はいくつか議論になったが、将来性を感じさせる高座が評価された。
	(関東参加公演の部) 春風亭 昇也 <small>しゅんぷうてい しゅうや</small>	「春風亭昇也独演会」の成果 <small>しゅんぷうていしゅうやどくえんかい</small>	冒頭、兄弟子の真打昇進披露で番頭役をつとめた体験談を面白おかしく紹介し、その後「庭蟹」「引越しの夢」「百年目」を「番頭」というキーワードで口演。三席それぞれ、構成・語彙・くすぐり・所作を含めて、流暢かつ丁寧に運び、高い技量を示した。とりわけ大ネタとされる「百年目」を、細部まで計算の行き届いた演出で聴かせてくれたことは、まことに稀有なことであった。
	(関西参加公演の部) チキチキジヨニー	「チキチキジヨニー単独ライブ～年ごまかしてたり、クビになつたりもしたけど～なんやかんやで20年」の成果	プロとしての初舞台から20年を記念する公演において、デビュー時のネタを含む漫才、コント芸などを盛り込んだバラエティに富んだ演目でその歳月を振り返った。満場の拍手喝采に目を潤ませる、その姿すら笑いに昇華する「人」としての魅力と、それだけに頼ることのない高い鮮度のネタとが同居する、充実のプログラムであった。
新人賞	(関東参加公演の部) 一龍齋 貞鏡 <small>いちりゅうさい ていきょう</small>	「一龍齋貞鏡修羅場勉強会」の成果 <small>いちりゅうさいていきょうしゅらばけんきょうかい</small>	真打昇進間近という大切な時期に、講談の原点である「修羅場」に挑み、研鑽の成果を示した。「源平盛衰記・青葉の笛」は抑揚を抑えた深みのある読み口で。「三方ヶ原軍記・土屋三つ石畳の由来」は張り扇を響かせ勇ましく、緩急を生かした切れ味の良い高座は、昨春死去した実父で師匠の八代目一龍齋貞山にも届いただろう。
	(関西参加公演の部) 京山 幸太 <small>きやうやま こうた</small>	「第二回京山幸太独演会」の成果 <small>だいにかいきやうやまこうたどくえんかい</small>	独演会では町田康の小説「バンク侍、斬られて候」を自身で浪曲化し、前編・後編に分けて口演。独特の世界観を持つこの物語に真っ向から立ち向かった。粗削りなところもあったが、仕草にも工夫を加え、テンポよく、聞きごたえのある熱演で聞くものを魅了した。浪曲への情熱と意欲に満ちた姿は今後のさらなる成長を期待させた。

令和4年度(第77回)文化庁芸術祭賞受賞一覧(参加作品・テレビドラマ部門4件)

区分	受賞者(団体)名	受賞対象	受賞理由
大賞	日本放送協会	忠臣蔵狂詩曲No.5 中村仲蔵 出世階段	源孝志の円熟した脚本・演出に加えて照明や美術などすべてを職人技によって作り込み、実在する江戸時代の歌舞伎役者・中村仲蔵がまさに奈落から舞台へと這い上がる姿を高い完成度で活写した。主演の中村勘九郎ら歌舞伎役者の優れた身体表現と、歌舞伎に挑む出自の異なる俳優たちの熟練した演技の競演も見どころとなった。
優秀賞	日本放送協会	よるドラ「恋せぬふたり」	LGBTQ関連のテーマを扱った諸作品が見受けられるなか、そのテーマを概念的に掲げるのではなく、生活の些細な細部の描写を丹念に積み重ねることで、幅広い視聴者に自然に理解・共感できるものになっている。そのことが本作を単なる啓蒙ではない、人生の多様性を見つめ直す「普遍性」のあるドラマに到達させている。
	株式会社WOWOW	連続ドラマW いりびと-異邦人-	主人公が卓抜した審美眼を持つ美術収集家という設定ゆえに、劇中絵画の「本物感」が確実に問われてしまうドラマだが、この難題に果敢に挑戦し大きな成果を上げた。物語構成にはやや既視感があったが、絵画作品群の見事な仕上がりと、それに見合った美術・照明・撮影・編集の連携による繊細な映像演出の説得力で独創的な表現に到達した。
放送個人賞	伊藤 沙莉	特集ドラマ「ももさんと7人のパパゲーノ」における演技	日常生活のモラルによってどうしようもなく追い詰められていく絶望。伊藤沙莉はこの作品で、その動揺と苦悩をこれ以上なく的確に表出した。同僚や家族や友達や恋人を前にして平静を装う表情のこわばりなど、伊藤が見せる日常下の気持の移ろい自体が、テーマ“パパゲーノ”を体現している。

令和4年度(第77回)文化庁芸術祭賞受賞一覧(参加作品・テレビドキュメンタリー部門4件)

区分	受賞者(団体)名	受賞対象	受賞理由
大賞	日本放送協会	BS1スペシャル 「正義の行方～飯塚事件30年後の迷宮～」	1992年に福岡県飯塚市で2人の女兒が殺害された「飯塚事件」。犯人とされた男性の死刑執行は2008年だった。しかし、えん罪を主張する再審請求が何度も提起され、事件をめぐる動きは現在も続いている。元警察官、弁護士、新聞記者など立場の異なる人たちの証言を検証しながら、事件の全体像と司法の在り方に迫った秀作だ。
優秀賞	琉球放送株式会社	還らざる日の丸～復帰50年 沖縄と祖国～	復帰50年を迎えた沖縄において、日の丸は「忌まわしい戦争の象徴」から「復帰への憧れと希望の象徴」へ、更に「裏切りの象徴」へと変遷した。その歴史を辿ったうえで、今年の式典と50年前の式典を並べて見せた構成に説得力があった。既視感のある素材も多いが、それこそが未だ本当の「復帰」が果たされない証左だと訴えているようだった。
	東海テレビ放送株式会社	はだかのER 救命救急の砦2021-2022	断らない医療を標榜する病院の救命救急センター、通称「ER」の現実には迫るなかから現場の医師そしてER医療が抱える葛藤を描き出した。本来、映像は多義的だ。撮影された映像には現場の様々な情報が含まれている。これをナレーションによって一義的にしないことで、現場のダイナミズムやリアリティを賦活させた。日本のテレビドキュメンタリーの映像表現を一歩先に進めた作品である。
	株式会社 BS-TBS	通信簿の少女を探して ～小さな引き揚げ者 戦後77年あなたは今～	ネット通販で購入した本に挟まっていた戦後間もない頃の通信簿。最優秀の成績だが、クラスの中でやや浮いた印象の一人の少女を探し始める導入はスリリングだ。足跡をたどる旅を通して大陸からの引き揚げ者の運命と、敗戦を挟み180度変わった歴史の断面が浮かび上がる。戦争を考えさせる人間ドキュメントとしてとても興味深く、意義深い番組となった。

令和4年度(第77回)文化庁芸術祭賞受賞一覧(参加作品・ラジオ部門4件)

区分	受賞者(団体)名	受賞対象	受賞理由
大賞	(ドキュメンタリーの部) 株式会社中国放送	生涯野球監督 迫田穆成 ～終わりなき情熱～	迫田監督の人生をスリリングに描き、参加番組の中で特に引き込まれた。6歳で被爆し広島商業時代に甲子園制覇。同高監督として1973年に優勝。当時あの怪物といわれた江川投手を2安打で攻略して名将と称される。83歳の今も生徒数150人の県立竹原高校野球部を指揮する。彼の卓抜とした世界観、野球観を巧みな構成と編集で描いた傑作。
優秀賞	(ドキュメンタリーの部) 山形放送株式会社	鉄格子に顔押しつけて 21枚に刻み込んだ「抵抗」	ローマ字教育によって誰もが平等に読み書きできる社会を目指していたが、戦時下には許されなかった。獄中で言論弾圧に抗い続ける斎藤秀一の反骨の生きざまを朗読劇で表し、軍国主義の愚かさを伝えている。ウクライナ侵攻に伴うロシアの情報統制につながる現代への警鐘ともなっており、平和の意義を再認識させられる作品。
	(ドキュメンタリーの部) 株式会社ニッポン放送	ニッポン放送報道スペシャル あの日の「誓い」から10年・始まった共生社会への挑戦!	視覚障害を持ちながら10年前の誓いを胸に中学校の英語教師として教壇に立った女性。全盲の教師に最初は戸惑う生徒たちだったが、障害を感じさせない実直な言葉と明るさで信頼関係を築いていくプロセスが丁寧に描かれている。取材を続けてきたスタッフの熱意を感じる。「共生する」とはどういうことか、理屈を超えた主人公の志が胸を突いた。
	(ドラマの部) 日本放送協会	FMシアター「琥珀のひと」	宇都宮放送局制作の「琥珀のひと」は、原発事故の放射能の影響で栃木の山林、川、湖まで汚染され仕事を失った人たちが、その不条理な中でどう生きて行くか、問う作品だ。カエデの森で、メーブルシロップを作り孤高に生きるモーリー(石橋蓮司)を訪ねて来る1人の女子学生(志田彩良)が織りなすドラマは、前半がやや冗漫ではあったものの、後半に入り会話の面白さで聴く者を魅了し、その問いかげを深く突きつけた。地方局からの発信に拍手を送りたい。

令和4年度(第77回)文化庁芸術祭賞受賞一覧(参加作品・レコード部門4件)

区分	受賞者(団体)名	受賞対象	受賞理由
大賞	有限会社日本アコースティックレコーズ	人間国宝 野村峰山 初代中尾都山～都山流尺八楽の軌跡～	明治4年の普化宗廃止後、混沌とした尺八界で頭角を現し大流派を確立した初世中尾都山。彼の本曲全曲のCD化と音楽的な分析をも試みた意欲的な解説および数種の楽譜校合を経た五線譜は、都山流本曲の全貌を明らかにし、その伝承のみならず、西洋音楽の導入によってダイナミックに変動した日本近代音楽史の研究に大いに資するものである。
優秀賞	株式会社ソニー・ミュージックレーベルズ	藤倉大:ピアノ協奏曲第3番「インパルス」ほか	小菅優のピアノ独奏が冴え渡る録音で、ことにラヴェルでは音楽を雰囲気流さず、オーケストラともども一字一句たどりながらも、自然な息遣いを付けて失わない演奏がみごと。小菅のために書かれた藤倉作品は、楽想が次々とめどもなく湧いてくる感触で、屈託なく一陣の風のように音楽が過ぎ去っていく。その軽みが本領。
	株式会社ソニー・ミュージックレーベルズ	藤田真央 モーツァルト:ピアノ・ソナタ全集	平成10年生まれの藤田真央が録音したモーツァルトのピアノ・ソナタ全集は、自発性に満ちた音楽的感興が、独自のモーツァルトの世界を醸成している。この恐いもの知らずとも評せられる奔放で果敢な音楽作りは、若き藤田の唯一無二の記念碑的な演奏ともなっている。日本人がモーツァルト解釈の新しいページを拓いた画期的録音だ。
	株式会社フォンテック	ヤコブ・ファン・エイク 笛の楽園Vol.8	一昨年、若くして亡くなった江崎浩司の、いわばライフワークとも言えるシリーズの完結篇。シンプルなりコーダー、およびそれに類する楽器から、めくるめく音楽が溢れるように出てくる魔法のようなアルバム。またそれに興じる演奏者の悦びが、曲のそここに見出され、聴き手の心をも愉しく豊かにしてくれる。これぞ笛の醍醐味。